

大澤広嗣著

## 『戦時下の日本仏教と南方地域』

新野和暢

### はじめに

本書は、戦時下の国家による仏教家利用の実態を明らかにしようとする試みである。タイトルは「戦時下の日本仏教と南方地域」と付されており、著者である大澤広嗣氏が大正大学に提出した博士学位論文「昭和前期におけるアジア諸宗教の調査研究活動に関する分析的研究」（二〇〇六年）がベースになつてゐる。この研究成果から、対象とする時期と地域などを絞り込むことによつて課題を明確にし、戦時中の日本仏教と国家との関わりを掘り下げた研究がなされている。

特筆すべきは、情報量の多さである。この点は後で詳しく触れるが、財団法人大日本仏教会（現在の公益財団法人全日本仏教会）の活動記録や、国立公文書館アジア歴史資料センターの活動記録や、国立公文書館アジア歴史資料セン

ター所蔵文書等の一次資料がふんだんに引用されている。さらに、本書で取り上げる人物が記した自伝といった、入手が困難な希少本へのアプローチも欠かしていない。そればかりか、当事者（宇津木二秀、佐藤利勝、志村陸城など）の遺品調査もなされている点は、歴史研究の模範的な姿勢である。そうした成果がいかんなく発揮されたことによつて、研究者の間でさえも認知度が低かった南方地域での活動実態を具体的に提示した。膨大な資料を纏めて提供しているがゆえに、同分野に関わる者への資料集的価値も有している。現職の文化庁文化部宗教課専門職という重責を担い、研究と向き合う時間的制約を抱えた身でありながら、資料を調査・精査し一冊に成果をまとめ上げた苦労は計り知れない。

タイトルを通じて評者の関心が惹きつけられたのは、「南

方地域」と日本宗教との関係性を視座に置きながら、戦時中の国家戦略の一端に迫ろうとする著者の研究方法についてである。この関心に基づいて評しておく。

## 一、南方進出と開教

日本仏教の海外での動きは、「開教」という概念を通じて語られることが多い。その意味で言えば、日本仏教の海外開教史という研究分野であつても良さうなものである。しかし、本書の関心はそこに無いように思われる。本文を通じて「開教」という言葉を用いておらず、「進出」という言葉で表現している。日本宗教が海外に教えを伝える活動の一環という視点で語られていないのである。このことについて特段説明を加えていないが、本書を読み進めてゆくと作為的であることは容易に理解できる。

日本仏教の「開教」の特徴は、「朝鮮」や「満洲」、中国などの租借地、占領地、植民地の獲得による日本人居留民の増加や、北米地域やハワイなどへの海外移民など日本人の動きに追従する形で行われることが多い点にある。それゆえ「追教」と揶揄されることもある。日本人を対象とする「開教地」での活動は、日本仏教を当地に弘めることにはならないという面から、「開教」ではないと言えそうである。しかし、

本書の射程が行き着く先は、この論がベースとなつており、また、結論でもあろう。その目的を達成する方法として、日本仏教思想の海外展開云々という姿で捉えるというよりはむしろ、「戦時下」の国家と日本仏教という構図で語ることが妥当であると判断し、仏教各派の枠内の議論ではなく、布教と文化工作とを峻別する研究方法を採用している。

こうした著者の姿勢は、「南方」という呼称の用い方にも見え隠れする。「南方」とは、日本から見て南の方角に位置する東南アジア諸地域のことである。一九四一年十二月八日の英國領マレー・コタバル上陸に始まる「南方作戦」など、

日本軍の進攻（戦略）でもしきりに用いられた用語が「南方」であり、「大東亜共栄圏」に包括される概念である。

本書で言う「戦時」とは主に、この「南方作戦」から敗戦までのことを指していることが多い。そうした「南方進攻」の一端に日本仏教が深く関係していることを読み手に伝える一つの方法として、当時の地域呼称などを用いる時代観の提示は、事実を忠実に記したいという研究姿勢の表れでもある。そして、著者が「近代日本仏教研究と日本勢力下東南アジア研究」に日本仏教が「南方」に展開する姿である。「日本勢力下東南アジア」と日本仏教が「南方」に展開する姿である。「日本勢力下

そうした理由で避けているのではない。本書が取り上げる「南方地域」での「開教」は、「特定の宗派に僧籍がある人」という特徴がある。この点は、中国大陆での海外開教（大陸布教）と状況が違つてゐる。宗教各派が競うように布教所や寺院を建立していく大陸布教に対して、「南方」で布教所を設立し布教活動に従事したケースは多くない。

その特徴は法制度の面から見ても明らかである。興亞院文化部と文部省宗教局は、「対支進出宗教団体指導要領」と「仏教各派対支進出指導要領」（一九四一年八月十一日）によつて、宗教各派による大陸布教を統制している。特に、「満洲事変」に始まる十五年戦争期は、獲得した占領地、植民地に移住する日本人に合わせた教線拡大があり、その活動は宗派単位で競うようにして行われた。そのため大陸布教を統制することで、国家戦略との関係性を強めようとしたのである。著者は、その統制方法と南方地域に対する戦略とを比較して、「南方方面は、文化工作を主体としたため、各宗派による布教を想定した制度は創出されなかつた」と論じてい

東南アジア研究<sup>(4)</sup>と著者が提唱しているように、「進出」と呼ぶべき在り方の確認や、日本側の関与の実態を日本仏教近現代研究に位置づける試みを表象しているのである。

## 二、本書の構成と特徴

構成は、全三部で序論と結論が添えられている。すなわち、第一部「戦時体制と仏教界・仏教学会」と第二部「南方進攻と仏教学者の関与」、そして第三部の「日本仏教の対南文化進出」である。各部はそれぞれ三～四章の論文から成っている。

大まかな流れを確認しておこう。第一部は日本仏教が関係する戦時体制を取り上げ、日本仏教を「南方」へと送り出す「インフラ」を整備していく過程を明らかにしている。既成仏教諸宗派からなる財團法人大日本仏教会や、『海外仏教事情』、英文雑誌『Young East』などを発行し海外との学術交流を目指した国際仏教協会、そして、巴利文化学院（一九四一年四月設立）を国際仏教協会から引き継ぎ、タイ語やビルマ語の話せる宣撫工作員を養成した財團法人仏教圈協会の活動実態を詳細に伝えている。こうして「南方地域」との繋がりの基軸となる日本国内の状況を明かにした上で、第二部と第三部でインドシナ、「ビルマ」など「南方地域」との具

体的な関わりに言及している。この二つは、仏教学者の活動を中心に取り上げる第Ⅱ部と、日本仏教が文化工作に関わった実事を扱う第Ⅲ部とで分けられている。著者は第Ⅱ部の意図を「僧籍を持つた学者による調査活動や宣撫工作を通じた戦争への関与を述べる」とし、第Ⅲ部は「布教活動でない文化工作として南方地域に進出した仏教界の動向を述べる」と説明している。この分け方を見て分かるように、「開教」と文化工作を別立し、さらに僧侶と「僧籍にある研究者」とを峻別している。僧侶の活動であれば「開教」と表現しても良さそうであるが、僧侶であっても研究者として文化工作を行った事に重きを置くという分け方は、先に触れた「開教」か「進出」か、という分析に通じる本書の特徴を象徴している。

第Ⅰ部をベースにして第Ⅱ部から第Ⅲ部へと地域別の事例が付記されていくという構成となっているが、内容的に見ると第Ⅰ部を中心にして、第Ⅱ部と第Ⅲ部というそれぞれの枝葉が伸びていると捉えるイメージが妥当であろう。第Ⅱ部と第Ⅲ部のそれを読み進める際、ところどころで立ち止まって第Ⅰ部を振り返ることで、その相関関係に気づくことができるはずである。

念のため第Ⅱ部と第Ⅲ部の関係を見ておこう。第Ⅱ部は第一章「興亞仏教協会のインドシナ調査」、第二章「ビルマ進

が独立した内容になつていて。

### 三、研究手法の特徴

冒頭でも触れたように、本書は情報量の多さが際立つている。とりわけ「南方進出」に関係した組織の人事や、その人物像が詳細に報告されている点が圧巻である。本文と、それを補足説明する脚注に至るまで、出身や学歴、経歴、そして僧籍の所在など調査報告がなされている。第Ⅲ部第三章「バンコクの日泰文化会館と仏教界の支援」では、一九四二年の日泰文化協定に基づき持ち上がりつた、首都バンコクに日泰文化会館を設置する計画に日本仏教が深く関わった事実を明らかにしている。これに関係する人物や人事を詳細することによって、国家的な事業と日本仏教との相互の関わりが一目瞭然になつていている。さらに、第Ⅲ部第四章「仏教留学生のインドシナ派遣」では、仏教研究を志して留学した仏教研究者の記録を、戦後の活動にまで幅広く取り上げている。第Ⅱ部第一章「興亞仏教協会のインドシナ調査」で取り上げている宇津木二秀によるインドシナでの活動内容は、生家の正徳寺（浄土真宗本願寺派、高槻市）で資料整理と調査を行つた研究成果をベースにしており、宇津木の日記などを通じて公的資料からは見られない一面に迫つてゐる。

攻作戦と仏教宣撫工作」、第三章「マラヤの占領と宗教調査」、第四章「仏教留学生のインドシナ派遣」に分けられている。

各章に共通するのは、それぞれの地域で活動した仏教学者らの活動詳報である。そして、第Ⅲ部は第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」、第二章「ジャワの仏教遺跡ボロブドウール」、第三章「バンコクの日泰文化会館と仏教界の支援」で構成されている。これらのタイトルを見て分かるように、それぞれ異なる地域が取り上げられている。そして、地域の異なりとともに日本仏教との関わり方もまた違つていて。例えば、第Ⅱ部第二章「興亞仏教協会のインドシナ調査」と第Ⅲ部第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」とを比べると、前者は参謀本部と日本宗教が一体となつてインドシナ（現在のベトナム、ラオス、カンボジア）で宗教事情を調査している実態が見られたが、後者は違う。かつてシンガポールに渡った真如親王（平安時代の皇族）を顕彰し象徴的な存在に位置づけようとした、有志からなる奉讃会と軍部との間に温度差が見られる。奉贊会は真如親王を祀ることによって、シンガポールを「大東亜共栄圏」の聖地にしたい意向を持つていたが、軍は時期尚早と判断し、動向を見守つていた。このように、扱う地域が違つていて第Ⅱ部と第Ⅲ部は、各章との問においても必ずしも相関関係を必要としておらず、それぞれ界も見え隠れする。

例えば、第Ⅱ部第二章「ビルマ進行作戦と仏教宣撫工作」では、ビルマ方面を担当した「第一五軍」の中に宗教部が設置され、ビルマに軍政を施した後に「第一五軍軍政監部」に改編され、宗教に関わる行政事務を扱う文化課が設置されたことを報告している。ここで本書が強調しているのは、僧籍を有する職員の存在である。真宗大谷派の仲野良俊や、日蓮宗の中島玄良、曹洞宗の大野普觀など、宗派を問わずに関係していたことが分かる。仲野は、ビルマで日本語教師をしていたことが自身の発言などから知られていたが、本書の論述に従えば、「文教部の部附で嘱託」であり、日本語学校とは別系統の軍政機構職員であった。軍政機構上の立場や肩書きから見えてくるものと、実体との間に隔たりが見られる。読者が違和感を覚えるかもしれない。さらに、中島が「後に神奈川県大磯町長」を勤めたことや、仲野が「後に同派の教学校研究所所長」の職にあつたことなども付記されている。

「後」とは、敗戦のことである。「戦時中」に軍政の職員として戦争に関係した人物が戦後に宗派や地方行政で重責を担つた事実は、読者に様々な想像力をかき立てることになるだろうが、いらぬ先入観を持たせる恐れも否めない。

少し本論の視点からずれるが、海外開教史の観点から見ると、占領地や植民地等における学校経営に仏教団体が関わることは珍しいことではない。「朝鮮開教」で先鞭を受けた大谷派は、一八七七年十一月に釜山別院を設立した後、居留民の小学校を置き、およそ三年間、学校経営をしているし、大陸布教に従事した開教寺院が日語学校を設立することは、「開教」の事業に含められていたことが知られている。また、大陸布教では、軍に帯同した従軍僧侶が占領後にそのままつまり、「開教」に従事したケースが見られる。「南方地域」と、これら地域での活動とを比較検討する論点を織り交ぜていたならば、「南方地域」での実情をより立体的に描いたであろう。

また、第Ⅱ部第四章「仏教留学生のインドシナ派遣」において、大日本仏教会がベトナムに派遣した留学生であった鈴木憲を取り上げている。研究中断を余儀なくされ、軍の通訳として戦争協力していく彼が、その慚愧の念から戦後に平和運動へと転じたことが取り上げられていることは、人間ならば、「南方地域」での活動と比較検討する論点を織り交ぜていたならば、「南方地域」での実情をより立体的に描いたであろう。

の戦争との関わりを考える上で思想的に興味深い。しかしながら、人物を中心に追うがゆえに全体的な問題を見落としてしまう可能性も否めない。

例えば、本章で鈴木がインドシナへと向かう前に、龍山章真『南方仏教の様態』という書物を批判したことを取り上げているが、その文脈の中で、「南方地域」を専門にしていなかつた様々な研究者たちが「南方」に関する著作していた事実を「南方出版ブーム」と呼んでいる。こうしたブームが存在したことは、重要な視点である。それは、なぜブームになつたのかという背景を明らかにすることが本書の研究目的にも直結するからである。『南方仏教の様態』については、様々な分野に影響を及ぼしたと思われるが、その中で次の様な当時の書評がある。

今龍山章真氏の南方佛教の様態を見るに、南方佛教の全面に渡り、その特質缺點について餘す處なく知ることが出来。その發生から各地域的變態について詳述してあり、この研究の形式にもう一步佛教未來發展史が述べられるならばも早完璧の形式としてこの研究書を、回教、基督教、印度教、その他の宗教の研究に及ぼして、よつてもつて宗教戰爭の原典として、今後の日本戰争の文化建設面の

具とすべきである。(大伴好雄)<sup>(8)</sup>

鈴木が考える研究者の的な視点とは全く違つて「戦争と宗教」の視点で評価が加えられている。この視点が、「南方出版ブーム」の背景にあつたはずである。鈴木が龍山の著作を批判した背景には、その点を垣間見たがゆえの反骨精神もあつたのかもしれない。いずれにしても、「南方出版ブーム」という特徴から、その背景へと展開してゆくような議論を提起することは、本書の目的に含まれるはずである。

#### 四、南方への進出と侵略

最後に、戦時期の日本仏教を語る上で避けることのできない課題について見ておきたい。それは、日本の植民地主義との関係性についてである。本書は、「南方地域」での宣撫工作や謀略の一端を明らかにしている。侵略行為を含む戦争と宗教の問題に切り込むことを目的に置いてはいないが、第Ⅱ部第二章「ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作」には、その問題を考えさせられる赤裸々な事実が記されている。この中に、「大東亜戦争」の大義名分に関わる事項を決定する「大東亜建設審議会」が一九四二年五月二十一日に決定した内容のうち「宗教ニ関スル方策」という一節があつた。

著者はこれを分析し、「不干渉という懷柔策でもあつたのである。」と説明している。そして、その実態の一つとして「緬甸仏教連盟」の存在を取り上げている。この連盟は、「ビルマ」を統治した「陸軍第一五軍」の司令部附として設けられた宗教宣撫班の後ろ盾のもとで設立された、現地の宗教者(会長=ニヤンヤン僧正)によって構成された組織である。この宣撫班の班長に陸軍大佐の小林長次が就き、合計六十二人の班員のうち五十三人の日本人僧侶と九人の通訳で編成されたことや、その活動内容を突き止めている。その上で、「緬甸仏教連盟」の綱領を紹介している。

本章が提示する内容の出典元は、能勢正信『火線と共に—ビルマ作戦宣撫手記』(東洋堂、一九四三年)である。この手記をもとにして事実認定されている項目が多数ある。資料的制約があるため、資料批判が十分に出来ない点は仕方ないが、「緬甸仏教連盟」については、高橋照空(第一五軍軍政監部文教部文化課陸軍司政官)も、宗教専門新聞の『中

外日報」に報告文を掲載している。両者の綱領を比べると内容に若干の相違が見られる。原文はビルマ語であり日本語に翻訳されているがゆえに誤差の範囲であろう。しかし、著者が『中外日報』の当該記事を調査済みであるならば、綱領の文言にゆれがあることを記したうえで、なぜ能勢の手記を優先したのかという研究過程を記すなど歴史研究の手続きが欲

そして、もう一つは「宣言」である。この「宣言」は、「緬甸仏教連盟」の「綱領」と同時に出来られたものである。能勢と高橋の二人とも「綱領」に続けてワンセツトで取り上げているが、本書では「宣言」について全く触れていないため、左記に全文を掲げておく。

実は、高橋の報告には、「宣言」や、「規約」が発布されていた事実も掲載されている。高橋によると「規約」は、「日本の宗教團體法と各宗の宗規と一緒にした様なもので、この規約に従つて全ビルマの佛教を統制操作して行かうといふのですから誠にビルマ佛教の特色が遺憾なく發揮されており、又前述のタタナパイン制度の具體的表示として面白いものがあります。本則は三十七ヶ條あり、これに中央と地方の事務所規定が添付されて、この規則がその儘施行されれば何の不自由なく動いて行ける様に出来てゐます」<sup>(11)</sup>と説明している。

「ビルマ」にもともと存在した制度を具体的にした形で宗教法が明文化されたというのである。「規約」の具体的な条文内容を提示しておらず情報が不足しているため内容分析に踏み込めないが、宣撫班の活動成果として「ビルマ」の宗教法が制定されていたとするならば、見逃せない事実である。

緬甸は英國の吸血鬼的全権勢力下に於る奴隸的存在より脱せんと血の鬭争を續くこと過去半世紀、遂に其の實を見ず。然るに東亞の指導勢力日本の躍起に據り世界情勢は急轉し、加ふるに獨伊の敢鬪ありて世界の舊秩序は常に崩壊せんとす。日本の今次大東亞戰爭の指導精神たる東亞新秩序の建設は全東亞諸民族の奮起を促し、八紘一宇の大施は世界史的進軍を開始せり。而も日本は神兵を派して長驅緬甸に入り、忽にして多年我等の念願たりし英國勢力を驅逐するのみならず、緬甸を理解すること深き日本は宗教宣撫班を特派し、我等の猛省と覺醒を促す。此の機を擇いて何日の日か緬甸人の緬甸を建設しえべき。我等佛教三派は過去の因習傳統を超越し、三大綱領の下に緬甸佛教聯盟を結成し、民衆の指導に任じ戰禍の恢復、民心の安定、治安の確保に寄與すべきを期すると共に互に主伴となつて各員の聯携融和向上を圖り外は

廣く大東亞佛教徒と接觸し以て全人類に佛道の大恩を  
光被せしめんとす  
右宣言す  
仰ぎ冀くは三寶俯して聖鑑を垂れ給へ  
皇紀二千六百二年六月十七日  
緬甸曆一千三百四年パタマ月五日  
緬甸佛教聯盟  
(12)

とも出来るかも知れないか。現場での活動実態は必ずしもそ  
うでなかつたのではないだろうか。占領期の「ビルマ政策」  
については、武島良成が論文「日本占領期のビルマにおける  
「ビルマ化」政策<sup>(14)</sup>」の中で、「日本化」や「皇民化」の他に  
「ビルマ化」があつたことを論じている。「ビルマ化」とは、  
英國支配によつて禁止されていた「ビルマ文化」復興の事で  
ある。その事に日本仏教が関与していたのかも知れないとい  
う可能性は、本書が目指す「日本勢力下東南アジア研究」に  
含まれた研究へと発展してゆくことを期待できるだろう。

以上のように若干の指摘を加えたが、本書が不十分な研究  
という訳ではない。「南方」における日本の宗教工作を仏教  
史研究の枠内で矮小化しないという問題提起は達成しており、  
「南方」の各地域が持つ特色を浮き彫りにした本書の功績に  
よつて、「大東亜共栄圏」の理想の全貌の把握により近づい  
たと言える。

として、我皇道の仙教に説導せしめ、ビルマ再建と大東亜建設に協力せしむることは、立ち上がるうとするビルマに取つて絶対的な國防部門であると私達は痛感した爲、トンゲー以来この機會をひそかに狙つてゐたのである。<sup>[13]</sup>」と、宣撫の結果を誇つてゐるほどである。本書が論じてゐるように、政策に關わる法令上の条文だけを見ると「不干渉」と読み取るこ

註

本書二六八頁

本書三十九頁

(4)

現在のミヤンマーのことであるが、「ビルマ」と表記した。

本書十一、十二頁。

本書十二頁。

- (8) (7) (6) (5)  
『真宗』第四九七号、十頁（真宗大谷派、一九四三年一月十五日発行）

(9) 宗教宣撫班とは別に、南機関（特務機関）が一九四二年四月にラングーンで「興國仏教連盟」（会長＝ガダージ僧正）

を結成しており、一九四三年六月に「緬甸佛教連盟」と統合させ、仏教弘通連盟が発足したことを本書は明かにしている。

(10) 高橋照空「佛教事情を中心とするビルマ雑記」（中外日報）一九四四年二月二十二日号一面）

(11) 同前。

(12) 『中外日報』昭和十九年二月二十二日付一面。能勢正信

『火線と共に——ビルマ作戦宣撫手記』（東洋堂、一九四三年）二八〇頁にも同様の内容が掲載されているが、本稿では報道紙である『中外日報』を引用元とした。

(13) 能勢正信『火線と共に——ビルマ作戦宣撫手記』一九四三年五月十五日、二七〇頁。本書では、この引用文の一部分を取り上げて、「宗教宣撫班の認識」として引用している。引用文中の「トングー以来」とは、焦土の街と化したトングーを訪れた能勢らが、宣撫班の任務と目的を決定した一件を指している。決定した内容は能勢正信の同書一三〇～一三一页を参照のこと。なお、能勢は任務を全うし一九四二年に帰国し、「私のこの三十六年の生きて来た道に、眞に生き甲斐の

ある一頁を加えてくれた」（同書三三六頁）と懐古している。

京都教育大学紀要 No. 110 所収、二〇〇七年三月、京都教育大学。

(14) 『○一五年十二月刊、法藏館、

A5版、三九八頁、四、八〇〇円+税

（名古屋大谷高等学校教諭にいのかずのぶ）